

美 游

VOL. 11

JUL. 1992



「都会の冬」野田英夫 油彩・板 21.5×45.3 1937年 熊本県立美術館所蔵

日系二世としてカリフォルニアに生まれた野田英夫(1908～39)は、アメリカの大都会とそこに生きる庶民の生活を描いた画家です。摩天楼そびえるビル街の光景ですが、どこかさわやかな印象の残る作品です。右下に、人物の顔が見えていますように、彼の作品では、必ず人々の生活がどこかに描かれています。

そして、彼らの暮らしがどんなに貧しくとも、いつでも希望の光を失わない明るさを、その表情に込めるのです。

9月12日(土)～10月18日(日)「都市風景の発見展」で展示

茨城県近代美術館友の会

Vol.12

1992年11月

美遊



「槿花」

西山翠嶂 大正12年作（京都市美術館蔵）

槿（むくげ）は、夏の朝に咲き、夕べにしぼんでしまう花です。古代中国では、この花を舜（しゅん）と言いましたが、また短命なるがゆえに瞬時の花としてとらえられました。ここでは、物憂げな美人が、はかなく清らかな花のイメージと重なり合い、抒情性にあふれる作品となっています。京都画壇で活躍した西山翠嶂の代表作であり、大正ロマンチズムをさわやかに謳いあげています。

「大正期の日本画展」で展示予定／1993年1月15日（金）～2月14日（日）

Vol.13

1993年3月

游 美



「大きな帽子をかぶったジャンヌ・エビュテルヌ」

■アメデオ・モディリアーニ作

●1917年●油彩・麻布●54×37.5cm●個人蔵

ジャンヌ・エビュテルヌは、1917年、モディリアーニと出会って以来、彼の最愛の伴侶となり、モデルとなった女性です。モディリアーニ特有の幾分かしいだ面長な顔立ちや独特の眼をした静かな表情が印象的ですが、鼻筋から軽く顎に添えた指にいたるS字状の優美な曲線、そしてその曲線に呼応する大きな帽子の緑の線、さらに髪や帽子、肌の色などが織りなすあたたかな色彩感、それらがこの作品の造形的な魅力となっています。当時、19歳のジャンヌは、三年後、一子を残し、モディリアーニの後を追ひ、冬のパリに短い生涯を終えています。

Vol.14

1993年7月

游 美



「ANNA」

「信仰と詩心の彫刻60年 舟越保武の世界展」で展示 1993年6月26日(土)～7月25日(日)

1970年作 ● 水沢市立高野長英記念館蔵

端正な目鼻立ちの少女像である。大理石による彫刻であり、肌理(きめ)がみずみずしくて、うつくしい。口裂は水平でなく、上品かつ優美に波打ち、上唇と下唇とが連絡する唇交連は、上方に向かって消え、微笑しているようである。

作者舟越保武は、大正元年に生まれ、石彫とくに大理石、砂岩などによる作品を得意とする。昭和25年、カトリック教会で洗礼を受け、以後、宗教的・社会的広がりのある作品も制作するが、この作品のように、究極の理想化に向かう若い女性像をテーマとした作品も多い。

アンナという名の彫刻作品はいくつかあるが、おそらく、それらはパリで描いた少女像のデッサンをもとに、モデルを眼前におかないで、絶えざる理想化と抽象化を繰り返しながら、制作されたものと思われる。まさしく彫琢され、入念にじっくりと仕上げられた作品であり、精妙かつ静穏な魅力を持った舟越保武の芸術の一面を代表する作品と言える。

Vol.15

1993年11月

游美



「若い男の肖像」ペルジーノ作 1445年～50年頃／油彩／40.5×25.5cm

「エルミタージュ美術館展－イタリア ルネサンス・バロック絵画－」で展示予定／1993年12月12日(日)～1994年1月30日(日)

ラファエロの師としても名高いペルジーノは、甘美で瞑想的な人物描写で、15世紀末から16世紀初頭のイタリアで、ということは、レオナルド・ダ・ヴィンチが活躍した盛期ルネサンスにおいて、かなりの人気を博していた作家です。後年、表現が形式化してゆきますが、ここに掲げた肖像画でも、どこか夢見るような男の表情に、彼の作風の特徴が遺憾なく発揮されています。エルミタージュ美術館展では、日頃、見る機会の少ないイタリアのルネサンス・バロック絵画を多数ご紹介いたします。

Vol.16

1994年3月

游美



このはなのさくやひめ りん きょう
「木華開耶姫」石井林響

明治39年作／115.0×60.0cm／千葉県立美術館蔵

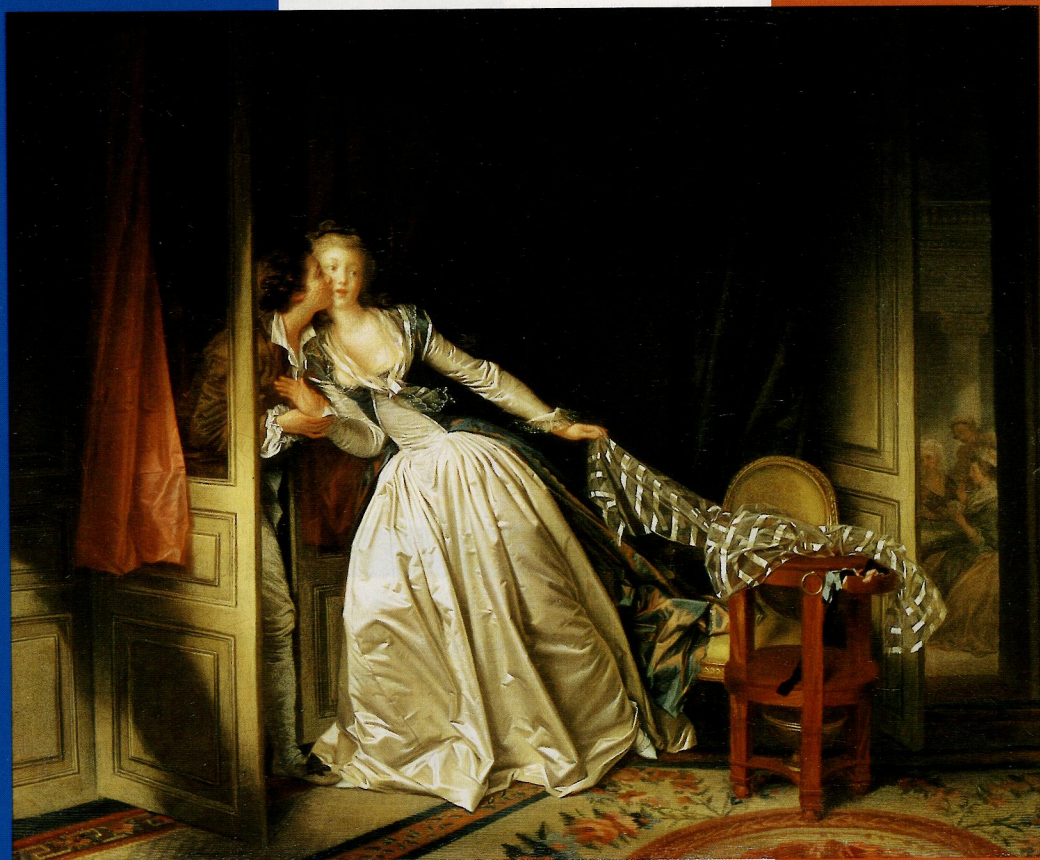
—近代日本画史を俯瞰するV—「明治の日本画」展で展示 1994年2月11日(金)～1994年3月21日(月)

「木華開耶姫」(このはなのさくやひめ)は、古事記などの古代神話に登場し、後世、木花のよう美しい安産の女神として讃えられています。ここでは、定かではありませんが、天孫邇邇芸命(てんそににぎのうね)が日向の高千穂峰(たかちほのむね)に天降(てんか)ってのち、はじめてこのヒロインと出会う場面でしょうか。女神の頭上に戴く桜の花は、古より木花を意味するともいわれ、「この世は木の花のようにはかないもの」と暗示しているようです。人物の瞬時の動作表現や心理描写の妙味など、当時の歴史画全盛期の中にあって、林響の優れた資質を余すところなく伝えています。

Vol.17

1994年7月

游美



「盗まれた接吻」 油彩／45×55cm ジャン・オノレ・フラゴナール

「エルミタージュ美術館展 — フランス バロック・ロココ絵画 — 」で展示 1994年6月25日(土)～7月31日(日)

この作品は研究者たちの間で、フラゴナールの妻の妹で弟子でもあったマルグリット・ジェラルムの作品ではないか、あるいは彼女との共作ではないかと、様々に議論されてきました。というのは、本作品のドレスや家具がき

わめて入念な手法で描かれており、フラゴナール特有の軽妙な筆致とは程遠いものがあるからです。しかし一方で、この作品の複製版画が〈フラゴナール作〉として画家の存命中から出ていたこと、また、男女の顔の描

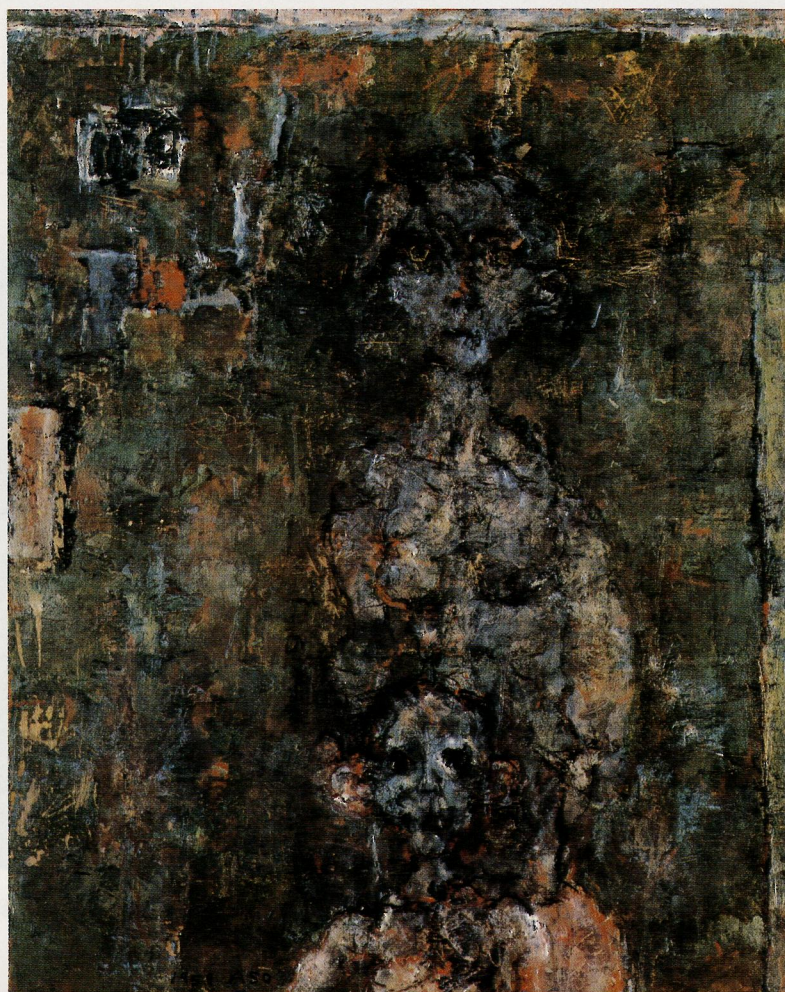
写にフラゴナールの筆を認めることが可能であるという事実もまた無視できません。これらの問題は未解決ですが、いずれにしても、本作品は見る者の目を惹き付けるに十分な魅力を備えています。

茨城県近代美術館友の会

Vol.18

1994年11月

游美



「母子」麻生三郎 1959年／油彩・カンバス／91.0×72.7cm／東京国立近代美術館蔵

麻生三郎展で展示 1994年12月10日(土)～1995年1月29日(日)

麻生さんの描き出す絵画世界は、本当に不思議な魅力に満ちています。その特徴と言えば、常に全体に暗い、渋い色調でおおわれていることと、そこに描かれたものたちが(多くは人間像なのですが)、その暗い背景に融け込んでしまいそうになりながら、かろうじてその姿を画面にとどめているといったところで、こういったことはすぐに指摘できるのですが、

さてその、あやうく消えてしまいそうなものたちが、どうにも見る者の心を捉えて離さない。全く不思議と言うほかないのです。

この作品でも、まるでミイラのようにやせこけた母と子の姿は、ちょっと見ただけでは、グロテスクにさえ感じられてしまうでしょうが、このあやうい影像に眼を凝らしていると、そのうち徐々に、何やら妙な、親しみの持てる、愛情に満ちあふれたよう

な、そんな不思議な感情が、我々の心の中に自然にじみ出てくるのを感じるのです。そんなバカなお思いになる方は、このような小さな図版では話になりません。是非とも展覧会にお越しになって、この不思議な心理の体験を味わってみることをお勧めします。

副主任学芸員 小泉淳一

茨城県近代美術館友の会

Vol.19

1995年3月

美 游



「華狩頌」棟方志功 1954年作／132×158cm／棟方板画館蔵

没後20年記念 棟方志功展 — 1995年2月15日(水)～1995年3月26日(日) — で展示

「花を狩るころおもいで板画しました。けものを狩るには、弓とか鉄砲とかを使うけれども、花だと、心で花を狩る。きれいな心の世界で美を射止めること、人間でも何でも同じでしょうが、心を射止める仕事、そういうものを、いいなあと思い、弓を持たせない、鉄砲を持たせない、心で花を狩るという構図で仕事

をした」(棟方志功著『板極道』)。

「^{はなかりしょう}華狩頌」と名付けられたこの作品は、野に虎や鹿を狩る様子を描いた高句麗古墳の舞踊塚の狩猟壁画(紀元後5世紀後半～6世紀前半)の構図と、けずり花という御幣のような矢を天に向かって四方に打つ北海道のアイヌの火祭りにヒントを得て制作された。

三角形の構図にまとめられた馬上の

狩人を中心に、背景は志功らしい装飾性に満ちあふれた動植物で埋めつくされている。第10回日展に出品された本作品は志功の代表作のひとつであり、この後彼は、サンパウロ・ビエンナーレ、ヴェネツィア・ビエンナーレなどで受賞を重ね、「世界のムナカタ」として数々の名作を生み出していった。

副主任学芸員 平野扶佐子

Vol.20

1995年7月

美 游



「鞭をもつ子供」ルノワール 1885年作/105×75cm/エルミタージュ美術館蔵
エルミタージュ美術館 展 1995年6月24日(土)～1995年7月30日(日)

かわいい子供が描かれている。だが、ここに描かれているモデルは、実は少女ではない。再びタイトルを見る。確かにそれは「鞭を持つ子供」であって「少女」ではない。この作品は、複製図版などで比較的良好に知られている。しかし、モデルが5歳の少年であると聞くと驚く人が多い。

この作品は、この少年の姉を描い

た「輪を持つ少女」(ワシントン国立絵画館蔵)という作品と本来は対になる作品であり、今では、ロシアと米国にこの姉と弟が別れ別れになってしまった。

ちなみに、このモデルはグージョンという人の三男だが、長男と次男を対にして描いた胸像の肖像画もある。

ルノワールは、印象派の代表的な画家として有名であるが、この作品は、彼の芸術のなかでは、特異な位置を占めるものであり、顔の描写を中心に彼の「アングル時代」における反印象主義的な特徴が顕著に認められるものである。

首席学芸員 舟木力英